

【Vol.19】Queen の名曲に学ぶ、メジャースケール活用法

こんにちは、大沼です。

前回までで、メジャースケールの構成と、重要なポジションを3つほど覚えましたね。

各ポジション、1日1回ずつでも良いので、毎日弾いてくださいね。

例えば1週間の内、特定の日にまとめて練習するよりも、少しでも良いので、毎日弾いていたほうが早く覚えられます。

さて、ペンタは5音構成なので、スケールポジションをスタート出来る音が5つあり、結果、全部で5ポジションしかありませんでした。

しかし、メジャースケールは、7音で構成されているダイアトニックスケールなので、スケールポジションをスタートさせる音が7つあることになります。

なので覚えるポジションは7つです。

さらに、1つのスタートする音から、色々なフィンガリングでスケールを弾けるので、結構な量の練習パターンがあります。

ここまでの話だけを聞くと、ものすごく大変そうですが笑、このメジャースケールの7ポジションを覚えると、今後やっていく、他のスケールのポジションもほぼ同時に覚えていることになるので、最終的に、各スケールを効率よく学べます。

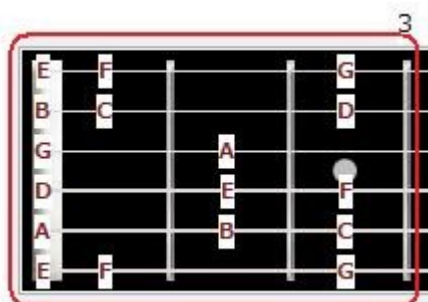
スケールそのものに慣れるまで、最初はちょっと大変かもしれませんが、踏ん張って学んでください。

世間一般の、アマチュアギタリストのレベルを超えられるかどうか、ここらへんが最初のポイントです。

これまでこの講座で、ペンタやら、トライアドやら、
結構な種類のトレーニングをこなしてきたあなたなら、
必ず乗り越えられますので。

と、言う事で今回は、メジャースケールの新しいポジションを1つと、
『Queen(クイーン)』の楽曲、“Bohemian Rhapsody(ボヘミアン・ラプソディ)”の
ギターソロを参考に、メジャースケールの活用例を学んで行きたいと思います。

ではまず、今回学ぶ、新しいメジャースケールのポジションはこちらになります。
引き続き、トニックは「C」で、Cメジャースケールで最初に覚えましょう。



このポジションは5弦3フレットのC音の場所をトニックに見立てたポジションになりますね。

基本となる練習譜例は以下です。

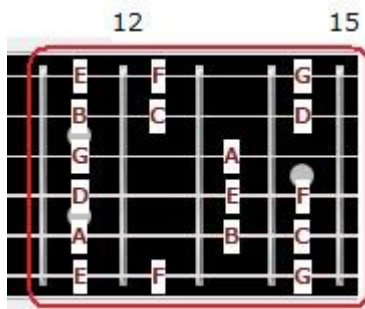
このポジションは、ギターを弾き始めて最初に、
「ギターでドレミファソラシドはここだよ」と教えられる事も多い場所ですね。

ですが今回は、ちゃんと「これはCメジャースケールである」という意識で弾いてください。

指使いは、1フレット人差し指、2フレット中指、3フレット薬指です。

トレーニングとしては、上の譜例の通りに普通に弾くものと、
前回やったような、4音刻み、3音刻みのパターンでも弾いてみてください。

次に、まったく同じ形のポジションを、1オクターブ上の場所で覚えます。



練習譜例は以下です。

こちらは、トニックを5弦15フレットのC音の場所に見ています。

このポジションを弾く時は、最初に紹介したポジションとは違い、
開放弦がありません。

なので、指使いは、12フレット人差し指、13フレット中指、14フレット薬指、15フレット小指
となります。

以上の2つのポジションが、オクターブ違うだけで、まったく同じものである、
ということを理解しておきましょう。

では次に、実戦譜例の方に行きましょうか。

参考にする楽曲は『Queen(クイーン)』の”Bohemian Rhapsody(ボヘミアン・ラプソディ)”です。

言わずと知れた、音楽史に残るであろう名曲ですね。

ギタリストは、ブライアン・メイ。

クイーンのギターアレンジでは、多重録音によるオーケストレーションが有名ですが、彼のプレイからは、ギターソロ全体の展開の仕方や、フレージングにかなりの音楽的知性を感じます。

後、彼のチョーキングやビブラートには、独特のエモーショナルなニュアンスがあるので、そういったソロが弾けるようになりたいならば、細かくコピーしてみると良い練習になると思います。

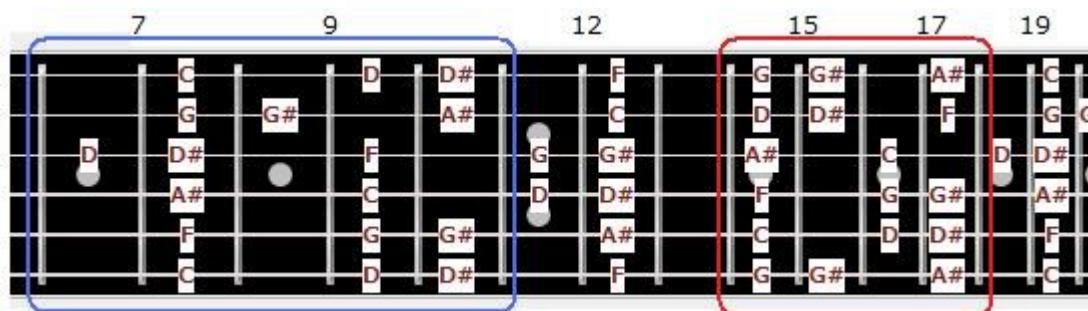
今回のギターソロでは、今まで覚えたメジャースケールのポジションが使われているので、その実例として弾いてみましょう。

ではまず、最初に確認しておく事として、これまではCメジャースケールで練習してきましたが、この曲のギターソロ部はkey=E \flat で弾かれているので、使うスケールはE \flat メジャースケールになります。

さて、こう言われて、メジャースケールのポジションをどう見たらいいのかがわかるならば、これまでこの講座でやってきた話を理解している、と言えるでしょう。

使うポジションは、前回と今回学んだものを使います。

具体的にはここですね。



※譜面作成ソフトの都合で、E \flat key での \flat 表示が出来ないので、D#をE \flat として見てください。
(なのでE \flat メジャースケールの場合、本来はG#はA \flat 、A#はB \flat として見ます)

青枠内のポジションが、前回学んだ6弦トニック(ルート)のポジション。
赤枠内が今回学んだ5弦トニック(ルート)のポジションですね。

主にこの2つのポジションを使って弾かれているギターソロになります。

youtube モデル楽曲リンク
<http://youtu.be/fJ9rUzIMcZQ>

※万が一、リンク先の動画が削除されている場合は、
音源を購入するか、曲名等で検索してください。

譜例、『Queen』 ”Bohemian Rhapsody ” 2:40~ 風フレーズ

The image displays a guitar score for the 'Windy Phrase' section of Queen's 'Bohemian Rhapsody'. It is organized into three systems, each with a standard musical staff (S-Gt) and a corresponding guitar tablature (TAB) staff. The key signature is B-flat major (two flats) and the time signature is 4/4. The first system begins with a melodic line on the 10th fret, marked with a mezzo-forte (*mf*) dynamic. The second system continues the melody, incorporating chords Cm, Fm, Fm/Eb, and Dm7(b5). The third system features a more intricate melodic line with triplets and accents, with chords Bb and Bb/D. The tablature includes fret numbers and techniques like triplets and accents.

※原曲ではベースラインのクロマチックアプローチがありますが、譜例では、重要なコードのみの表記にしております。

弾いてみるとわかると思いますが、今まで学んだポジションがちゃんと使われていますね？

それなりに細かい音符が並ぶところもありますが、楽曲のテンポが遅めなので、焦らずに弾きましょう。

※最後の小節(D \flat コード以降)では、E \flat メジャースケールからは外れた音が出てきますが、これは転調しているコード進行に合わせたものです。

さて、大本の原曲のソロとしては、「全8小節(+前後1小節ずつ)」のソロになりますね。

上のサンプルも、ある程度は似せて作っていますが、その8小節間の展開を分析すると、

- ・まずはゆったりとしたメロディックなフレーズで導入
- ・次に、4小節目のソロ全体の切り替えしの部分に向かって、徐々にテンションを上げていくようにフレーズを激しくして、盛り上げたところで前半が終わり。
- ・後半の最初、5小節目では、4小節目からの勢いを受け継いで、音数多め、音域高めで弾いて、6小節目で2小節目のフレーズをモチーフとしたものが出てくる。
- ・そして7、8小節目では、次の楽曲パートへの流れとして徐々に盛り下げていって、ボーカルにパス、といった感じでしょうか。

こう見ると、かなり考えられたソロであることが伺えますね。

こういった分析をすることによって、自分がソロを作る時や、アドリブをする時に、ストーリー性のあるプレイが出来るようになっていきます。

過去の講座でやったソロなども、フレーズを追うだけではなく、

『弾いている人が何を考えているのか？』

その辺りを意識しながら、もう一度弾いてみると新しい発見があるでしょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼